

文語日誌（平成二十八年二月二十二日）

石平氏の著書「論語道場」（知知出版、平成十九年刊）を神保町の古書肆にて購入す。石平氏と我が國の論語を愛する識者との對談集なり。

石平氏は一九六二年四川省の生まれ也。文化大革命の時代に密かに祖父手書きの白文にて論語を學ぶ。手書きの白文はその都度注意深く焼卻すと云々。北京大學哲學科卒業後、一九八八年に來日、神戸大學大學院に留學す。三ノ宮ジュンク堂の棚に並ぶ論語關係書籍の数の多きに壓倒せられ、いと感激せる由。

元外交官岡崎久彦先生（昭和五年生れ）は、好む論語の一節として、子路十三「中行を得て之に與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は爲さざる所有るなり」を擧げて曰く、中行の人、即ち中庸を守る立派なる人物と出會ひ、その人物と共に仕事を爲すこそ最善なれ。されど、バランスのとれたる人物稀なれば、共に仕事を爲すならば、狂者或は狷者ぞよからむとの趣旨なりとぞ。狂者は人のせぬことを進みて爲す人、狷者は人の爲すと言ひても爲さぬ人、言はばへそ曲がり也。陸奥宗光は六石狂夫を號とすれば狂者也。狷者には土佐人多く、典型は板垣退助也。岡崎先生は書を頼まるれば「必也狂狷」の四文字を揮毫する多し。

J R 東海會長葛西敬之氏（昭和十五年生れ）の家系は代々佐渡島の漢學者・醫者。昔の葛西家の子弟は三歳ともならば中國本土より來れる住み込み家庭教師につき漢文を學びたり。葛西氏、リーダーたるべき人間の先づ記憶すべき言葉として、「夫子の道、忠恕のみ」及び「民、信なくば立たず」を擧ぐ。

安岡正篤氏の弟子、伊與田覺氏（大正五年生れ）は、毎日論語一篇を讀み、（論語は二十篇より成れば）一年間に十八回論語を通讀するを習慣とせり。

渡部昇一先生（昭和五年生れ）は、特に感銘を受けたる論語の言葉として、「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを樂しむ者に如かず」、「朋遠方より來たるあり、また樂しからずや」、「學びて思はざれば則ち罔し、思ひて學ばざれば則ち殆し」を擧ぐ。

石平氏、あとがきに曰く、「日本に傳來せる論語の言葉と精神は、その最も深き意味に於きて、よりよく理解・實踐・繼承せられたるに非ずや」と。

（平成二十八年三月十六日受附）